野菜は愛しいムスメたち　農家研修を通じて学んだこと

農地基盤工学研究領域　水田整備ユニット研究員　新村麻実

こんにちは。4月より農村工学研究部門に採用された新村です。研究者としてまだまだ駆け出しの私は様々な業務を通じて勉強の日々を過ごしています。先日の8月6日から10日の若手研究員農家研修において、農業経営者にお世話になりながら農作業に従事させていただきました。「百聞は一見に如かず」ということわざがあるように、文献で得た知識よりも多くを学び、忘れられない5日間を過ごしました。今回はその研修で感じたことを紹介します。

朝日町の夕焼け

私がお世話になったのは富山県下新川郡朝日町のクリーンみず穂という農業法人です。疲れを忘れるほどキレイな夕焼けが日本海に沈んでいく様子を毎日眺めて過ごしました。私はそんな朝日町で主に農作物の収穫や出荷作業を体験しました。出荷作業はオクラ、玉ねぎ、無臭にんにくといった収穫物をそれぞれ決まった重さまで袋詰めし、値札をつけた後に直売所とスーパーに陳列しに行くというのが一連の手順です。

「収穫した野菜はムスメみたいなものだからね。
売れ残らないようにキレイに包んでね。」

そうアドバイスを受け、袋詰めをしました。厳しい選別基準の中選ばれた野菜だけが店先に陳列され、さらに消費者の目に留まった野菜だけが売られていく…そう考えると袋詰めする私の手にも力がこもります。一年前、少しでもいい印象を持ってもらいたくて必死で化粧を練習し、採用面接に臨んだ自分を思い出しました。

とれたてのムスメたち

陳列を待つムスメたち
（無臭ニンニクとオクラ）

陳列作業は直売所やスーパーの開店前ではなく、開店中に陳列をおこないました。商品を陳列していると、

「これどうやって食べるの？」
「この前買った野菜美味しかったわ」

と直接お声をかけていただく機会がありました。お客さんと交流ができるため、開店中にあえて作業を実施しているとのことでした。私自身は緊張しながら商品を並べていたため、お客さんと交流する機会は少なかったのですが、私が並べたムスメたちをたくさん買い物かごに入れている方を見かけて思わず笑みがこぼれました。

「野菜は作ったら売れるんじゃない。作った分だけ野菜を売るんです。」

そう仰った研修担当者の厳しい眼差しが印象的でした。農作物を作っても、買い手がいなければ利益が出ず、農業として経営が成り立ちません。そのため、農地の条件に適した作物ではなく、買い手がつく農作物の栽培が求められているように感じました。農地によっては栽培作物がうまく育たない場合も考えられます。そんな時に農業土木分野の観点から具体的に解決策を提案できるような研究者になりたいと思いました。そして、自分が作りたいものではなく、現場のニーズに対応しなければいけないのは研究や技術開発においても同様だと感じたので、様々な研究分野・部門と連携して消費者と農家のニーズを満たしたムスメをいつか送り出したいと思った農家研修でした。

朝日町を一望して

おわり